TANAKA HIROFUMI
PRESENTS
RAKUGO THE FUTURE
JAPANESE TRADITIONAL ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第15回:夏を涼しく過ごすには

暑い。毎日、むちゃくちゃ暑い。私は何が嫌いだといって暑さほど嫌いなものはない。だから、「熱」とか「暖」「温」「燃」といった文字に対しても過敏に反応してしまう。
星飛雄馬が目の中に炎を燃やしながら、「花形！　俺は今燃えているぜ！」などと叫び、しばらくすると背景も一面の火事になったりするのを見ると、不動明王か、おまえは！　と突っ込みを入れたくなる。歌謡曲で「熱い熱い情熱の嵐」「燃え上がる二人の愛」などという歌詞があると、聞いていてにわかに発汗し、床がべとべとになったりする。こんな性格なので、夏にはクーラーがかかせない。健康によくないと知りつつも、一日中クーラーの中に浸っている（クーラーの機械の中という意味ではない）。喫茶店でも、クーラーの効きが悪かったりすると、たちまち仕事をやる気が失せてしまい、しかたなくマンガを読んだりすることになる。余談だが、あるいきつけの喫茶店は、私が入っていった瞬間に「アメリカン一丁！」と自動的にオーダーが通る仕組みになっている。常連扱いされているわけで、喜ばしいことなのかもしれないが、この猛暑の中を全身からだらだら汗を垂らしながらちゃりんこを飛ばしてやっとたどりついた喫茶店で、いきなりアメリカンというのはちと過酷である。本当は「アイスコーヒー！」と叫びたいのだが、せっかく向こうが気を利かせてくれているのだから取り消すのも悪いと思って我慢し、熱々のコーヒーが生ぬるくなるまでさましてから飲む。そうするとオーナーに「わざわざ挽きたてをいれたったのに、なんですぐに飲まへんの！」と怒られることになる。毎日喫茶店で仕事をしていると人知れぬ苦労があるのである。

こんな暑い酷暑の日々には、ざるそば、ざるうどん、冷麺、そうめん、かき氷、冷や奴などの冷たい食べものを皆さん食べておられるのだろうと思っていると、やはり世の中にはいろんな人がいるもので、日本一のジャイヴシンガー藤井康一の曲に「熱燗と中華」というのがある。この曲の主人公は「暑い暑い夏には、冷たく冷えた生ビールもいいけど、やっぱりいつもの……」と言いながら、駅前の中華屋で熱燗とラーメンを注文し、スープやシナチク、麺、チャーシューなどを少しずつアテにしながら熱燗を飲むのである。聴いているとなかなかの説得力があり、ちょっとやってみよっかなあという気持ちにさせられる。

こういう変人は別として、昔から人間は暑い夏を乗り切るためにいろいろと知恵をしぼってきた。上方落語でいうと、まず誰もが思い浮かべるのは「青菜」だろう。植木屋が、出入り先の旦那のお酒の相手をすることになったが、旦那曰く、「夏にお酒をやると、体がほめいてどもならん。井戸に柳影冷やして飲ってんねやが、植木屋はん、あんた柳影飲んでか」つまり、夏の暑いときに酒を飲むとよけいに暑くなるので、柳影という飲み物を冷やして飲んでいる、と言っているのだ。では、この柳影とはいったいどんな飲み物なのだろうか。植木屋は旦那のこの発言を聞いて、「へえー、柳影とはまた贅沢なもん飲ってなはる。柳影ちゅうたら、昔は大名酒ゆうてお大名しか飲まなんだお酒やそうで。いただきます。ちょうだいします」と応えている。ということは、何となくすごく高級な酒のようだが、実はこれは焼酎をみりんで割って甘くしたものだそうだ。焼酎にみりんとは、何とも安っぽい感じだが、考えてみれば、甘くした焼酎をよく冷やして飲むというのは、今でいうチューハイとかカクテルの感覚だろう。暑気払いにはちょうどよいわけだ。東京では「直し」という名前らし

RAKUGO THE FUTURE

第15回:夏を涼しく過ごすには

文:田中啓文

いが、そんな安っぽい飲み物でも、「柳影」と名付けると高級な雰囲気がしていいではないか。

「遊山船」というネタにも、庶民の暑気払いの工夫が出てくる。夜、浴衣を着て、大川にかかる橋の上に夕涼みに出るのだ。川風が吹いてきて、なかなか気持ちいいし、何よりゆったりと流れる川の水を眺めているだけで涼しい気がするものだ。この噺の主人公たちは、橋の上から、川を往来する大きな屋形船でのどんちゃん騒ぎを見物しながらうらやましく思うわけだが、一番興味深いのは、屋形船の連中がいろいろと趣向を凝らし、それを橋の上の見物人が褒める、というやりとりである。たとえば、大屋形の連中がみんな錨の模様の入った揃いの浴衣を着ているのを見て、「よおよお、本日の秀逸！　さってもきれいな錨の浴衣！」と褒めると、船のほうから「川に落ちても流れんように」という当意即妙の応えが返る。橋の上の貧乏人も船の中のお大尽も、どちらも遊び心を持っているという点がうれしいじゃありませんか。これが歌舞伎のほうになると、橋の上から大金持ちの船遊びを眺めていた鋳掛け屋（やかんや鍋の穴をふさいだりする職人）の松五郎がつくづく人生に悲観して、「あれも一生これも一生。こいつは宗旨を変えにゃあならねえ」と言って、鋳掛け屋の道具一式を川に投げ込んでしまって、盗賊になる……というかなり殺伐とした展開になってしまう（「黙阿弥の「船打込橋間白波」いわゆる「鋳掛松」ですな）。やはり、落語のほうが気楽である。この夕涼みや屋形船での船遊びの模様は、「船弁慶」というネタにも出てくるので、夏を涼しく過ごす方法としてはかなりポピュラーだったと思われる。

米朝師匠などがやる「次の御用日」というネタには、途中で、夏の売り声がいろいろと挿入され、雰囲気を盛り上げる。夏の売り声は眠気を誘うものが多いそうで、たとえば金魚売り。ところてん売り。枇杷湯蕩という飲み物売り。寝莫蓙売り。どれもゆったりとした調子で売りに来るので、聞いているほうは自然にこっくりこっくりと居眠りをしそうになる。それを起こしてまわるのが、氷のかち割り売り。「かち割りや、かち割りや！　割った割った！」……リリパット・アーミーの芝居では、この部分のパロディで、麻薬を売りにくる売り声というネタがあったような記憶がある。

有名な「千両みかん」も夏のネタである。あれが冬場だったらあんな悲劇（？）は起こらなかったわけで、若旦那が本来みかんのない夏にみかんが食べたいといって病気になってしまったからどたばたになるのである。今は食べるものに季節感がないので、夏でもみかんが食べられるから、聞いているほうには、どうしてみかんを冬に食べるのがそんなにたいへんなことなのかがぴんとこない。そこを、聴衆をして江戸時代と同じような価値観にしてしまうのが演者の腕である。

禅の公案（師匠が弟子に悟りのきっかけとなるように与える問題）で、夏の暑さや冬の寒さを忘れるにはどうしたらよいかというのがある。さて、どうすればいいのでしょう。答は、暑い時は自分自身を徹底的に猛暑と化し、寒い時は自分自身を極寒とすればよい、というのだが、意味わかる？　暑さ寒さを忘れたり回避したりせずにそれと同化しろっちゅうことでしょうか……。

というわけで、上方落語にみる暑い夏の過ごし方をいろいろと書いてみたが、うーん、今回はこのまま「上方芸能」に載ってもおかしくないような内容ではないか。

ところで、よく、昔の少年雑誌の口

TANAKA HIROFUMI
PRESENTS

RAKUGO
THE
FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第15回:夏を涼しく過ごすには

絵のページなどに、怪獣を人間の役に立てるには……というような特集が組まれており、ペギラやバルゴンといった冷凍怪獣は、たいてい「夏を涼しくする」とか「冷蔵庫のかわりにする」とかの役目を負っていた。そういえば、そのものずばりのアイスラーというのもいたな（ジャイアント・ロボ）。しかし、小説としてのＳＦに目を転じてみると、あんまり「暑い夏を涼しく過ごす」というのがテーマの作品はないようである。これはどうしたことか。クーラーの普及などで、逆に夏はどんどんどんどんどんどん暑くなってきているのだ。これを何とかしないと、今に日本は熱帯雨林になってしまい、庭にスフランが生え、道をアナコンダが這い、ピラルクやアロワナが群れる沼地を掻き分けるようにして学校へ通うことになるだろう。そうなったら私のような「何が嫌いだといって暑さほど嫌いなものはない」人間にとっては地獄である。

ここで、非常に深遠かつ重要な命題について考察してみたい。なぜ、四季などというものがあるのだろうか。そういううっとうしいものがあるから、こんな暑い思いをしなくてはならないのだ。

「あのねえ、日本人というのは昔から四季の移り変わりを感じて花鳥風月という……」

そんなもの夏の暑さに比べれば大した問題ではない。

「四季折々の風物を愛でるというのが日本文化の大きなもとに……」

それなら何ですか、あなた。これから毎年毎年毎年毎年、死ぬまで夏は暑いままでいいというんですか。

「そらそやろ」

いかあああああん！　春の次は夏が来て夏の次は秋が来て秋の次は冬が来て冬の次は春が来て春の次は夏が来て夏の次は秋が来て秋の次は冬が来て冬の次は春が来て……という生活にみな慣れすぎている。野坂昭如大先生も「春は夏に犯されて夏は秋に殺される」と歌っておられるではないか。そうだ、若者よ、聖徳太子を、いや、弘法大師を、いや、マグマ大使を……とにかく大志を抱け！　さっそく四季のない場所へ行こう。そんなことができるのかって？　かーんたんである。宇宙空間へ出よう。惑星の自転から解放されれば、四季の移り変わりなどという面倒くさいものから自由になれるのだ。春も夏も秋も冬もない一年中涼しいそよ風が吹く世界を作ろうではないか。やれ、夏物だ冬物だ秋物だ春物だとファッション業界をもうけさせることなく、ずっと同じ服、同じふとんで生活できる。うるさい蝉も鳴かないし、うっとうしい夕立も、プールへ連れてけとせがまれることも、打ち上げ花火の残滓で頭が真っ黒になることも、汗で脱水症状になったり、冷たいものの飲み過ぎやクーラーのかけすぎで体調を崩すこともない。そうだ。日本人よ、四季をやめよう。なーつを愛するひーとーはー、とか歌うのをやめよう。劇団四季を見るな、ビバルディの四季を聴くな、正岡四季を読むな、四季島パンを買うな、四季四季魔女先生を見るな、小野不由美の四季を……ああ、これは読もうねみんなできれば水霊も読もう。はあはあぜいぜい。キュウリも茄子もミカンも鮎もカツオも苺も大根もネギもサンマもとにかく何もかも一年中ある今の世の中、季節感などという贅沢なもののことは忘れようではないか。季節感？　旬？　四季折々？　そんなものは一部の金持ちにしか味わえないもんだ。旬ではない時にその魚（や野菜）が出たら怒って食べない？

ふーん。わしら日頃コンビニの弁当をチーンしてうまいうまい言うて食べているわけで、「うーん、この大盛りチキンカツ弁当の付け合わせのキュウ

RAKUGO THE FUTURE

第15回:夏を涼しく過ごすには

文:田中啓文

リは、これは今年の初物ですな。初物食べると寿命が1年伸びるといいますから、ああ、めでたいめでたい」てなことはありえないわけである。ハウス栽培だろうが冷凍物だろうが輸入ものだろうが、うまいと思えばうまい。まずいと思えばまずい。四季なんかなあ……四季なんかなあ……大っ嫌いだあああああああああ。あんなものは祈祷師のお祓いでどこかに消してしまおう。四季を祓いて清めたまえ（いまいちわかりにくかったかな）。

とにかく四季が非常に大事な、特別なものである、というのは日本人の幻想に過ぎない。やっぱり夏は涼しいほうがいいでしょう。さあ、これを読んだみんな、たった今から四季をこの世から抹殺するための運動に立ち上がれ！　四季なんて空しい物だ。だって、昔からよく言うではござらぬか。四季即是空て。

これが言いたかった。

やっぱり夏は暑くないとね。冷えたビールもうまくないし。

どかっ。ばかっ。ぼすっ。